

山登りで癌体験者の QOL

(クオリティ・オブ・ライフ) の向上を

橋本しをり さん

平成12年の「ガン克服日米合同富士登山2000」以来、FRCC（フロント・ランナーズ・クライミング・クラブ）を立ち上げ、がん体験者の登山活動を支援している橋本しをりさん。東京女子医大神経内科准教授として医療に携りながら登山のフィールドでも医療ボランティア活動を続けていらっしゃいます。

(インタビューと文：張晶子)



◆山との出会いは

一生まれは神奈川の秦野です。父が結核療養所に勤務していた関係で、その官舎で小学校に入る前までの幼児期をすごしました。自然の多い環境で、家族でもよくハイキングをしていたと覚えています。

はっきりと「山は面白い」と思ったのは、成城学園中学2年の夏です。学校登山で、北アルプスの燕岳から槍ヶ岳までの縦走コースに参加した時のことです。部活動では生物部と水泳部に入っていましたが、生物部では、蝶を追いかけて道無き道を歩きました。顧問の先生は本当に蝶が好きな面白い方でした。高校ではフィールドホッケー部に入っていました。

◆本格的な登山は大学からですか

一東京女子医大に進み、そこでワングル部に入りました。夏合宿は24名で巻機山から越後駒ヶ岳までの縦走でした。ガーゼで水を濾したりしなければならぬ山でしたが、とても印象に残っています。

冬山登山を希望したのですが、ワングル部では冬はスキー合宿ということになっていたため、当時休部となっていた山岳部を復活できないかと、先輩の今井通子さんに相談したのです。今井さんの所属するJECC（ジャパン・エキスパート・クライマーズ・クラブ）の羽村隆さんをコーチに迎え、1年の終わりの春休みに山岳部は復活、成立しました。2年の夏は、後立山から槍ヶ岳の縦走、冬には八ヶ岳の赤岳での合宿を行いました。

その後、コーチに大蔵喜福さんや根岸知さんが加わり、岩登りも始めたのです。夏、女子のみで前穂のIV峰へ登りに行った時には帰幕時は真暗で、涸沢では遅くて有名な存在でしたけどね（笑）八ヶ岳の赤岳主稜などの冬のバリエーション入門コースにも行きました。

◆ヒマラヤに興味に向いたのはいつごろからですか。

—4年生くらいから岩登りをもっとやってみたいと思い、グループ・ド・ロックというクラブに入りました。日本山岳会の学生部でも活動していましたので、ヒマラヤニストといわれる人たちは周囲に多かったと思います。冬の穂高の屏風岩から滝谷まで連続して登れば、ヒマラヤに行けると言われ、挑戦はしましたが、敗退でした。

80年に女子医大を卒業し、山はやめたと思いました。実際、卒業後2年くらいは仕事で山どころではありませんでした。

82年に、たまたま読んだ山と溪谷に、女子登攀クラブのブータン遠征（田部井淳子隊長）の記事を見つけ、ブータンに行きたいという気持ちもあったので、医療担当隊員として応募、参加しました。

◆山と仕事の両立はここからスタートですか。

—登山における医療分野の研究には、最初から必ずしも意欲的だったわけではないのですが、このブータン遠征で隊員の健康管理を通じて得られたデータは興味深いものでした。低酸素の環境での女性に関する研究を教授に認めていただいたことで、方向性を見出しました。

この後、85年に天山山脈のトムール峰（田部井淳子隊長）、87年に田部井さんとペルーアンデスで、ピスコ峰・トクヤラフ峰など5000M以上のピークを4つ登りました。そして、88年に女子登攀クラブで隊長としてガッシャブルムII峰登頂（隊員8名中5名が登頂）したのです。

◆医療ボランティアに興味を持ったのは？

—GIIの後、88年から94年までニューヨークに医学留学をしました。ここで、アメリカの医療と日本の医療の違いを感じてはいましたが、きっかけとの出会いは帰国後ドイツのデュッセルドルフに行った時のことです。

がん小児科医の友人と街を歩いていると、ジュニアのテニスマッチが行われていました。試合を終えた少女が彼に駆け寄ると、何かを話してまたコートに戻って行きました。

その少女は、彼の患者さんで、ドイツのがん協会が毎年実施している「夢をかなえる1日」プログラムに選ばれ、プロテニス選手のステファニー・グラフとテニスをしたり、一緒に買い物をして食事を作ったりして1日を過ごすという夢をかなえた少女でした。そのプログラムの話と、テニスをしていた少女の姿が深く印象として残りました。

そして99年に、新聞紙上で日米のがん患者さんたちが富士登山に合同で挑むという記事を読んだとき、医療ボランティアとして応募したのです。

◆そこから FRCC への道が始まったのですか。

—富士登山は、参加者が全部で400名という大がかりな計画でした。関東地区の100名を超える参加予定者と月に一回の訓練山行を重ね、医療スタッフのリーダーである伊丹仁朗先生を中心に医療準備を進め、アメリカのガイドたちとも事前の富士登山を行うなど、準備の疲労を蓄積したまま2000年8月22日の当日を迎えたものです。

これと前後して、文通していた『アメリカで乳がんと生きる』という本の筆者松井真知子さんが亡くなるという辛い出来事もありましたが、富士登山時に行った乳がん患者のQOL（クオリティ・オブ・ライフ）の検討で、登山前後で身体症状、精神状態、心配事の指標で改善を認めたことは一つのきっかけを生みました。FRCCを発足させたのは、一年後、6人の患者さんと再度富士登山をした2001年の年末でした。

会則などが出来たのは、2002年の4月です。毎月の日帰りハイキングと夏には2泊3日くらいの少し高い山をめざす山行を行っています。現在メンバーは80名ほどで、山岳と医療のサポートを受けています。

◆ 仕事と山を両立させ、且つご自身のライフワークとして取り組んでいらっしゃる橋本さん。お忙しい中、ありがとうございました。